

(7) 女子中学高等学校の運営総括

校 長 浅 里 慎 也

2021 年度年間聖句

「キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。」

～ エフェソの信徒への手紙 2 章 2 1 節 ～

はじめに

2020 年度から続く新型コロナウイルス感染症の影響は、今年度も学校生活に大きな制約と変更を与えました。昨年度同様に緊急の対応に迫られることも多々ありましたが、教職員の協力と昨年度の経験を活かした工夫で今年度末を迎えることができました。しかし、この2年間に渡るこれまでに経験のない状況によって、成長期の生徒が受けた精神的なダメージが心配されます。それについて現時点では明確な指摘はまだなされていませんが、生徒の学校生活から心配される点がいくつか見受けられ始めています。今後生徒の肉体的・精神的な変化に注視していく必要があります。

今年度は昨年度にもまして年間計画の変更が相次ぎ、生徒のみならず保護者への周知や業者対応に多くの時間を費やさなければならませんでした。また、コロナ禍にありながら、今年度は本校がこれから取り組む探究型授業・PBL 学習に関して学び知る機会を教育研究部が中心となり設けられたことは、今後の本校が行うべき教育の方向のひとつが示されたと考えます。そして本校がこれまで新しい教育を目指す時には常に土台に建学の精神があったことを忘れてはなりません。更にどのような新しい教育を造り上げる時にも、学びの中心に生徒がいる教育を目指すことが本校のあるべき姿だと確信します。

2022 年度生徒募集の結果は一貫課程・高校課程ともに 2021 年度を上回ることができました。本校に期待する生徒、保護者に応える教育を行う責任を教職員がともに持ちたいと考えます。

働き方改革に関して、より良い労働環境づくりのために教職員がともに話し合い作り上げる努力を継続します。

重点目標

- これからの時代に相応しい学力・能力の習得
- 歴史と伝統の学びと継承
- 入試広報・生徒募集活動と財政健全化
- 危機管理体制の整備

1. 「建学の精神」に基づくキリスト教教育について

礼拝(学級・講堂)はコロナ禍の制約の中で教職員の協力と工夫で継続されました。分散・リモート形式での礼拝を通して改善点と今後への可能性も見出されました。礼拝が本校のキリスト教教育の中心であり続けるための努力と理解を継続することが大切です。また、年度末に礼拝の中でウクライナでの紛争に関わり平和への祈りを行うことができました。今後もキリスト教主義学校としての平和の尊さを意識するための企画やプログラムを期待します。

- ・今年度も聖書の授業で学年聖句を用いた継続性のある授業を実施しました。
- ・本校聖書科の教員をはじめ、地域の教会から牧師を招き、講堂礼拝で説教を聞く良い機会がありました。この取り組みの継続を期待します。
- ・道徳の教科化についての研究は情報収集のみで、具体的な実施はできませんでした。

2. 学習指導及び生徒指導について

1) 学習

- ・探究型授業の推進、PBL 学習の取組み

夏・冬休み期間に新たに開始した教育研究部による探究型授業・PBL 学習(セミナー・研修・ワークショップ)に関する研修は、次年度以降学校全体で取組むための機会となりました。教科事情はそれぞれ異なりますが次年度以降、各教科及び科コースで情報を共有し、協力して学校全体で取組みたいと思います。

- ・英語研修プログラム(長期・短期・国内)の研究と検討

今年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響により留学(長期・短期)プログラムは大きな影響を受けました。この間の留学に替わる企画、授業内での英語力向上のための研究実践に今後の英語科の可能性を期待します。

- ・言語教育(英語・国語)の研究

現在策定中の2025グランドデザインで具体的な検討を行っていきます。

- ・ケンブリッジ英検認定校の継続と課題整理 : 認定校継続を実施しました。

- ・全生徒の学力向上対策検討

各教科及び科コースでの学力向上対応は授業アンケート等を用いて実施していますが、学校全体での対策検討はできませんでした。

- ・オンライン授業の研修と研究

教育研究部主催の探究型授業・PBL 学習に関する研修会で、授業の展開方法と同時にタブレットの活用方法について事例を通して学ぶことができました。

2) 厚生

今年度も新型コロナウイルス感染症により、YWCA による教会での奉仕、ZontaG クラブ、札幌ライラックまつり奉仕など、施設訪問も含め活動の実施は限定的なものとなりましたが、クリスマスカード等を届けることができた施設の入居者から生徒宛てに心温まるお礼の手紙が届き、直接奉仕することの喜びが伝わったことは大きな収穫でした。

3) クラブ指導

今年度も本校の部活動を目的として多くの生徒が入学してきたことは嬉しいことでしたが、部活動も新型コロナウイルス感染症拡大の影響を大きく受けることになりました。制約された活動環境の中で練習し、全道大会や全国大会への出場権獲得を目指した大会がコロナ禍により中止や延期など残念な状況になることも多くありました。生徒の体調管理と同時に精神的なケアを含めた部活動指導は、例年以上に苦慮しなければなりませんでした。

4) 進路指導

- ・オンライン指導の研究

コロナ禍によって授業の形が安定しない時期が続きましたが、中学ではタブレットを用いた授業も行うことができました。高校は対面授業・オンライン配信授業・ハイブリット授業など授業方法を変えて実施しなければなりませんでした。生徒の理解度、授業展開等の検証が必要です。

- ・大学入学共通テスト対策 : 例年通り実施できました。
- ・学習合宿(High コース)の実施 : 予定変更が続く中、宿泊せず実施できました。
- ・補習・講習の充実 : 放課後の活動が大きく制限され、実施は大変難しかったです。
- ・専門英語科

海外大学への進学の高まっています。成績上位の生徒は国内大学への進学を避ける傾向が見受けられます。海外大学への進学サポートを含めた支援の必要性を感じます。

2021 年度卒業生、北星学園大学及び北星学園大学短期大学部への進路

＜合格者内訳＞大学 25 名・短大 6 名／計 31 名（内、国公立併願 4 名、他私立併願 1 名）

- ・学園内推薦者：大学 22 名（併願 3 名中 1 名国公立合格により辞退）、短期大学部 1 名（国公立合格により辞退）
- ・公募推薦者：大学 2 名、短期大学部 4 名
- ・一般入試者：大学 1 名（他私立合格により辞退）、短期大学部 1 名
（科コース別内訳：中高一貫入学者 Core コース 5 名、高校からの入学者：Core コース 10 名、High コース 1 名、英語科 15 名）

＜入学学科内訳＞大学 23 名・短大 5 名／計 28 名（学園内推薦 21 名・公募推薦 6 名・一般 1 名）

- ・文学部 英文学科 4 名、心理・応用コミュニケーション学科 4 名
- ・経済学部 経済学科 3 名、経営情報学科 4 名（内 1 名国公立併願）、経済法学科 4 名（内 1 名国公立併願）
- ・社会福祉学部 福祉計画学科 1 名、福祉臨床学科 2 名、福祉心理学科 1 名
- ・短期大学部 英文学科 2 名、生活創造学科 3 名

北星学園大学の魅力を教員にも周知することから、教員向け説明会の実施などを大学の入試課と検討しています。

5) 生活指導

昨年度から続く新型コロナウイルス感染症の影響が、生徒の心理面に出始めている問題がいくつか起こりました。また、生徒個人からではなく、家庭内や親子関係が影響していると思われる問題も起こりました。学校生活の制約や学校行事の変更による不安等で生徒の心身に与える影響、現在の社会情勢が保護者に与える影響も含め、今後も注視が必要です。

- ・生徒指導、保護者対応の研修：実施できませんでした。
- ・中学生のタブレット使用ルールの検討が必要です。
- ・保護者が期待する生活習慣の習得のための指導：十分な実施はできませんでした。
- ・生徒指導、保護者対応の研修：個々の対応に終始しました。
- ・学校生活マナー指導 5 項目（挨拶・言葉遣い・大声を出さない・飲食・正しい制服着用）

夏・冬用の制服の切替え時期や長期休暇明けに玄関で指導を行いました。

- ・1 年生（緑の教室）、4 年生（ルーキーズキャンプ）は、本校での生活をスタートするために大切な行事です。今後も工夫して継続が必要です。

3. 教員の資質向上について

- ・担任研修（学級運営・保護者対応・他）：実施できませんでした。
- ・初任者研修・中堅教員研修

日本私立中学高等学校連合主催初任者研修会のみが開催され、他は開催されませんでした。

4. 生徒募集について

1) 入試

- ・一貫課程入試にⅠ期・Ⅱ期を設けたことの効果がありました。また、3 年前から導入している英語入試の効果が継続しています。
- ・今後も定員充足を目標に入試方法の工夫を図りたいです。
- ・SNS を用いての広報効果の有無をアンケートで調査します。

2) 広報

- ・中学高校ともに入学手続き者数が昨年度を上回ることができました。募集広報の働きをはじめ教職員がともに生徒募集に努めた結果のあらわれだと考えています。入学後早急にアンケートを実施し入試結果の分析を行い、次年度の対応を急ぎます。
- ・SNS 等デジタル広報媒体有効活用の研究と実施

入学後のアンケートで確認しなければなりません、確実にその効果を感じることができ

ます。次年度以降も継続します。

- ・説明会、オープンキャンパス(小学生対象)継続開催と企画の充実
コロナ禍により実施できませんでした。
- ・学校塾訪問方法の研究と継続
今年度は実施できませんでした。次年度計画的に実施します。
- ・女子校、女子教育の良さを十分広報できませんでした。

5. 教育環境及び施設設備、財政について

1) ICT 環境

今年度は Wi-Fi 環境が大幅に整備され、教職員の ICT 活用頻度が増加しました。また中学生は一人一台端末使用が可能となり、タブレットを活用した授業展開が始まりました。次年度以降、4 年生、5 年生のタブレットを活用した授業展開に備えます。

- ・学園 ICT 活用教育委員会との連携協力
校内 Wi-Fi 環境整備、生徒へのタブレット配付など学園内の情報共有と検討アドバイス等がこれまで以上になされ、大きな助けとなりました。
- ・ICT 機器の保守管理体制の強化
ICT 機器の保守管理を学園全体で実施するための情報共有がなされました。次年度以降も学園としての ICT 機器の有効活用のための連携を継続したいです。

2) 財政目標、財政改善の取組み

- ・財政健全化計画
2030 年度に経常収支差額均衡を目指し、2025 年度に向けた財政健全化計画を策定しました。2022 年度当初予算では経常収支差額が今年度補正予算額から約 2,950 万円改善しましたが、経常収支差額は約 1 億 1,300 万円の支出超過となっています。2022 年度に中学高校とも入学手続き者数が前年度を上回ったことは、財政改善にとって大きなことです。今後も改善努力を継続していきます。
- ・奨学金制度の有効活用の研究
生徒募集への影響を考慮しながら 2023 年度生徒募集に係る奨学金制度の支給内容と方法について見直しを検討しました。今年度は中学入試成績上位者を対象とした特別奨学金の運用変更を行いました。
- ・収入増に関する研究(補助金・寄付金・他)：学園と情報共有しながら補助金活用に努めました。

6. 高大連携及び地域連携について

2020 年度に Core コースに医療看護系、北星学園大系コースを新設したことは、連携強化にはつながりましたが、北星学園大学への進学者数の増加にはまだ繋がっていません。次年度は、連携授業を担当した北星学園大学の先生からの意見も踏まえ、より良い高大連携プログラムを目指しつつ、学園内学校として、さらに連携を強化していく必要があります。

- ・学園内連携の視点から、中学生の研修に大谷地キャンパス内施設を使用することで、北星学園大学・北星学園大学短期大学部を生徒がさらに身近に感じる試みを実施することができました。
- ・コロナ禍で活動が制約された状況でしたが、4 年目を迎えた町内会との校庭リング共同育成と町内ゴミ拾い運動を実施することができました。また、昨年度中止された町内会雪明りづくりについては、規模を縮小してスミス寮の生徒が参加することができました。

7. その他

1) 学校運営のあり方

昨年度から続く新型コロナウイルス感染症への対応、またそれによって生じた新たな対応事

項は年度当初の予想を超えたものでした。そのため通常の学校運営にも影響及ぼしました。今年度は教頭を3人として学校運営にあたりました。校務担当や分担に関して、或いは学校運営体制を拡充したことに関して振返りは必要ですが、今年度は新体制で乗り切ることができました。

- ・教頭3人制：担当業務の効率化と教育改革第Ⅱ期の推進

担当業務の効率化は計画通りに実施できませんでした。コロナ禍が昨年度に続いて学校運営に大きな影響を与えている現在の状況は、終息を願いつつも容易に解消されることは難しいと判断します。生徒のために学校組織が機能的に運営されるよう今年度の経験を生かす必要があります。

- ・教育研究部の新設

教育研究部が精力的に本校のこれからの教育に係る学び・提案等を提示してくれました。生徒が学びの中心にいる教育を進めるために次年度設置する教育改革委員会の働きと連動する活動を期待します。

2) 理事会との連携

学園の中長期計画であるグランドデザイン(2030・2040)にある、女子中高に期待される教育を実践する学校として、常任理事会・理事会で財政状況が厳しい中であっても、学園内学校として実践している教育と学校状況を発信しました。

2040年に向けた女子中高の使命と目標及び教育目標で、教育改革の骨子として、①21世紀教育、②言語教育、③キリスト教教育、④女子教育、の4つの取組みを掲げました。それぞれの実践状況は以下のようになっています。

- ・21世紀教育への取組み：ケンブリッジ英検の取組みの継続、将来の学校形態検討
- ・言語教育：ランゲージアーツの研究と実践
- ・キリスト教教育：学年聖句の活用

危急の課題である財政健全化に関しては2025年度までに1,000万円の奨学金の削減実施を目指しています。財政健全化に直接影響する2022年度生徒募集は中高とも昨年度比約10%増となりました。

3) その他

2023年度から高校で新カリキュラムによる授業が始まります。各教科及び科コースの意見をすべて満たすことはできませんでした。今後、論議を重ねて決定した新カリキュラムを会議で出された意見も参考に実施していきたいと考えます。

以 上